

Press meets Risk Communication

International Symposium on Endocrine Disruption
December 05 2005, Okinawa Convention Center

Shigeyuki Koide, The Yomiuri Shimbun

リスクと報道（本日のお話の内容）

- 1) 日本のジャーナリズムの科学報道
- 2) メディアによって混乱が増幅された検討例
(環境ホルモン、ダイオキシン)
- 3) 科学情報、技術情報を伝える難しさ
(高速増殖炉「もんじゅ」事故)
- 4) 騒動から得られたもの、残る疑問

新聞社に科学部が誕生したのは？

新聞各社の動き

- ・読売新聞に科学報道本部(1956年2月)
(68年2月に科学部に)
- ・朝日新聞が科学部設置(1957年5月)
- ・毎日新聞が科学部設置(1957年12月)
- ・読売の科学報道本部が科学部に(1968年2月)

背景

- ・原子力委員会の発足、科学技術庁の設置、ソ連の人工衛星打ち上げなど科学技術を巡る大きな出来事が相次いだ
- ・専門的な部を設けないと、対応が難しくなった
- ・原子力開発のスタートが新聞社に科学部を生んだといえる

科学・技術をめぐる環境も、変容している

科学の内在的問題

- ・要素還元主義の限界
- ・細分化する専門領域の隘路、総合的評価の需要
- ・複雑性、多様性を解明する役割

社会との関係

- ・知識のための科学から、社会のための科学へ
- 時代の要請は
- ・俯瞰的視野や総合性が求められる時代
 - ・多分野の共同作業の必要性
(文理融合、境界領域を埋める重要性)

科学部の取材対象となるリスク

- ・ 医療事故 東京医大、東京女子医大
- ・ 感染症 HIV、SARS、インフルエンザ
- ・ 食品安全性 BSE、遺伝子組換え食品、スギヒラタケ
- ・ 化学工業、化学物質リスク
- ・ ロケット打ち上げ
- ・ 航空機事故
- ・ 原子力事故
- ・ 化学テロ、生物兵器
- ・ 生態系保全、生物多様性減少
- ・ 地球環境、気候変動によるリスク

ダイオキシン、環境ホルモン騒動 (マスメディアが関与した混乱例)

- 1) 98年1月、メディアで始まった混乱
- 2) WWFのリスト、野生生物で初めてのデータ裏づけ
(「奪われし未来」の出版 97年9月)
- 3) 生活面、教育テレビの世界から、ニュースへ(1月)
(黒本の存在と、環境省クラブの継承事項)
- 4) 社説、コラムに発展(2月)
(「ヒトは子孫を残せるか」「内分泌かく乱物質の不安」)
- 5) 実像を超える報道の増加(4月)カップ麺騒動
- 6) 評論家の「切れる子供たち」発言、TV番組の影響
「恐れのある物質」、「猛毒」、「子供たちがキレル原因」
= 社会的事実と科学的事実の乖離
- 7) 環境ホルモン騒動本格化と母乳是非の混乱、冷静な議論を
求める批判意見
- 8) 収束と忘却、次の標的は？

ダイオキシン汚染拡大 検出地点10倍増

ダイオキシン汚染初報

1998年1月7日付け朝刊

水底16、魚類25か所

【東京7日電】環境省が発表した調査結果によると、ダイオキシン汚染が拡大していることが明らかになった。水底16か所、魚類25か所で検出された。これは前年と比べて10倍増の検出地点となった。環境省は、ダイオキシン汚染の拡大を防止するため、汚染源の特定と対策を急ぐとしている。

96年度前年比 環境庁全国調査

| 都道府県 | 水底 | 魚類 | 合計 |
|------|----|----|----|
| 北海道 | 0 | 0 | 0 |
| 東北 | 0 | 0 | 0 |
| 関東 | 1 | 1 | 2 |
| 中部 | 1 | 1 | 2 |
| 近畿 | 1 | 1 | 2 |
| 中国 | 1 | 1 | 2 |
| 四国 | 1 | 1 | 2 |
| 九州 | 1 | 1 | 2 |
| 計 | 6 | 6 | 12 |

注：前年調査結果と比較し、水底16か所、魚類25か所、合計41か所増の検出地点となった。

ダイオキシン汚染拡大の現状と対策について、環境省の担当者が説明している。

ダイオキシン汚染拡大の現状と対策について、環境省の担当者が説明している。

ダイオキシン汚染拡大の現状と対策について、環境省の担当者が説明している。

ダイオキシン汚染拡大の現状と対策について、環境省の担当者が説明している。

ダイオキシン汚染拡大の現状と対策について、環境省の担当者が説明している。

ダイオキシン汚染拡大の現状と対策について、環境省の担当者が説明している。

ダイオキシン汚染拡大の現状と対策について、環境省の担当者が説明している。

ダイオキシン汚染拡大の現状と対策について、環境省の担当者が説明している。

ダイオキシン汚染拡大の現状と対策について、環境省の担当者が説明している。

ダイオキシン汚染拡大の現状と対策について、環境省の担当者が説明している。

ダイオキシン汚染拡大の現状と対策について、環境省の担当者が説明している。

環境ホルモン検出を伝える記事

(1998年1月6日朝刊)

性ホルモンかく乱^疑感物質

環境庁調査で検出

辺野港
周川や
都市河
大川

野生動物やヒトの性ホル

モンをかく乱して、生殖異
常をもたらすとされる「内

分泌かく乱物質(環境ホル
モン)」の一種「ビスフェ
ノールA」が、大都市周辺
の河川や港湾の底質調査
で、過半数の調査地点から
検出されたことが六日、環
境庁のまとめで初めて明ら
かになった。同じでは、近
く発表する有毒化学物質に

関する年次報告「化学物質
と環境」で、詳細を公表す
る。

「ビスフェノールA」は
合成樹脂(ポリカーボネー
ト)の原材料で、女性ホル
モン(エストロゲン)に近
い化学構造を持つ。体内
に入ると女性ホルモンと同
じ働きをし、生殖機能を乱
れさせると指摘されてい
る。

環境庁の全国調査では、

大都市を中心に一九七四年
から毎年、環境中の化学物
質の残留状況を調べてい
る。今回は全国計五十六地
点で、川底や海底の泥、魚
類、水質を調べた。
その結果、底質の調査地
点となった計五十五地点
中、60%に当たる三十三地
点で、0.0005ppm-0
.6ppmのビスフェノールA

が検出された。

また、水質調査でも、五
十地点中36%に当たる十八
地点で検出(0.01-0
.268ppm)されたほか、
五十一地点中三地点の魚類
からも0.015-0.2
87ppmの範囲で検出され
た。検出された地点につい
ては公表できないとしてい
る。

ビスフェノールAは環境
庁の研究班が内分泌かく乱
物質としてリストアップし
た六十七物質の一つだが、
環境基準はない。同じでは
七六年度にも調査したが、

この際には検出されなかつ
た。同じ環境健康部は、「ビ
スフェノールAは内分泌か
く乱物質の疑いがあり、今
後も環境の調査と監視は必
要」と指摘している。

井口泰泉・横浜市大理学
部教授(内分泌学)の話「環
境中に散布する農薬と違っ
て、合成樹脂原材料である
ビスフェノールAは本来、
環境中に存在しないはず。
河川や港湾から検出される
ことが自体が問題だ。検出濃
度で生物に影響が出るかど
うかは不明だが、きちんと
した追跡が必要だ」

環境ホルモン記事数の推移

1998.01 - 09

